

増加するアジア向け農産物輸出（ブラジル）

1. はじめに

2003年のブラジルの農林水産物輸出額は、前年比23.4%増の306億3,900万ドルを記録した。5年前（98年）の215億7,500万ドルと比べると42.0%増である。地域別の輸出額ではアジア向けの増加が顕著で、2003年に前年比33.4%増の55億3,600万ドルを記録している。98年の30億500万ドルと比べると84.2%の増加である。アジア向けのシェアは、98年に13.9%、2002年に16.7%、2003年に18.1%と年々拡大している。

この増加を牽引しているのは中国向けである。2003年のアジア向け輸出額の40.9%（22億6,100万ドル）を占め、農林水産物輸出相手国としては米国、オランダに次ぐ3位となっている。5年前（98年）は、中国のアジア向け輸出額に占めるシェアは19.7%（5億9,100万ドル）、輸出相手国としては12位であった。

日本は、98年にアジア向けで1位であった（10億5,700万ドル）。2003年は10億5,900万ドルと金額では98年と同水準にあるが、輸出相手国別ではアジアでは中国に次いで2位、世界では98年の5位から10位に後退している。

農業輸出分野でアジア向けの存在感が高まっている。中国については、最近の両国の外交関係強化と、「一次産品を輸出したいブラジルと輸入したい中国」という補完関係の確立が急増の要因とみられる。本稿では、中国向けに輸出が急増している大豆と、アジアで発生した鳥インフルエンザや、米国で発生したBSEなどで代替供給可能国として脚光を浴びた食肉の2品目を取り上げ、生産、輸出、主要企業の動向を中心に今後のビジネスの可能性を追う。

(表1)経済圏別農業輸出額

(単位)百万ドル、%

	2003年		1998年	
	金額	シェア	金額	シェア
EU	11,153	36.4	8,561	39.7
NAFTA(メキシコを除く)	5,292	17.3	3,493	16.2
アジア	5,536	18.1	3,005	13.9
中東	2,085	6.8	1,281	5.9
ロシア・東欧	1,935	6.3	897	4.2
ALADI(メルコスールを除く)	1,165	3.8	786	3.6
アフリカ	1,472	4.8	1,008	4.7
メルコスール	945	3.1	1,865	8.6
その他欧州	522	1.7	377	1.7
その他米州	408	1.3	208	1.0
オセアニア	125	0.4	93	0.4
合計	30,639	100.0	21,575	100.0

(出所)農務省『Balança Comercial do Agronegócio 2003』

(表2)アジア向け農産品輸出(国・地域別シェア)
(単位)百万ドル、%

国別全体順位	国・地域	2003年	
		金額	シェア
3	中国	2,261	40.9
10	日本	1,059	19.1
14	香港	559	10.1
16	韓国	428	7.7
24	インドネシア	220	4.0
26	台湾	202	3.6
29	タイ	174	3.1
30	インド	155	2.8
33	シンガポール	140	2.5
48	マレーシア	97	1.7
	その他	242	4.4
	合計	5,536	100.0

(出所)農務省¹Balança Comercial do Agronegócio 2003₁

1.大豆

生産量は10年前の約2倍

ブラジル大豆生産は2003年に5,153万トンであった。主な生産州は、マトグロッセ(1,271万9,000トン)、パラナ(1,099万1,000トン)、リオ・グランデ・ド・スル(957万9,000トン)、ゴイアス(631万9,000トン)である。近年、ブラジル大豆生産量は国際価格の上昇にも押され急増しており、2003年は前年比22.3%と10年前(93年、2,259万1,000トン)に比べ約2.3倍になっている。

(表3)ブラジルにおける大豆生産推移

(単位)千トン、千ヘクタール

年	ブラジル			主要州別生産							
	生産量	収穫面積	平均収穫(kg/ha)	マトグロッセ州		パラナ州		リオ・グランデ・ド・スル州		ゴイアス州	
				生産量	収穫面積	生産量	収穫面積	生産量	収穫面積	生産量	収穫面積
1993	22,591	10,635	2,124	4,119	1,679	4,764	2,074	6,067	3,078	2,004	983
1994	24,932	11,525	2,163	5,320	2,023	5,333	2,154	5,443	3,185	2,310	1,111
1995	25,683	11,675	2,200	5,491	2,323	5,694	2,206	5,848	3,007	2,147	1,122
1996	23,167	10,299	2,249	5,033	1,956	6,440	2,387	4,236	2,494	1,962	880
1997	26,393	11,486	2,298	6,061	2,193	6,582	2,541	4,755	2,942	2,464	1,022
1998	31,307	13,304	2,353	7,228	2,643	7,314	2,859	6,463	3,172	3,409	1,383
1999	30,987	13,061	2,372	7,473	2,635	7,755	2,788	4,467	3,051	3,420	1,334
2000	32,821	13,657	2,403	8,774	2,906	7,188	2,858	4,784	3,002	4,093	1,491
2001	37,907	13,985	2,711	9,533	3,121	8,615	2,818	6,952	2,975	4,052	1,539
2002	42,125	16,365	2,574	11,702	3,824	9,539	3,310	5,611	3,295	5,406	1,903
2003	51,532	18,469	2,790	12,719	4,410	10,991	3,640	9,579	3,591	6,319	2,177

欧米農業経営者が新たな土地を求めてブラジルに

2002年のブラジル通貨レアルの下落を契機に、欧米の農業経営者による土地購入が増えている（「ヴァロール」紙、2004年7月23日付）。ブラジルには、二期作が可能な気候に加え、安価な労働力と米国の10分の1の土地価格、そして高生産性というメリットがある。主な購買対象州は、トカンチンス、マトグロッソ、パイアなどで、外国人投資家向け農業用地専門の不動産会社もある。生産品目は大豆だけではなく、綿花やトウモロコシといった国際市況品である。米国には、ブラジルへの農業投資を斡旋する企業(注)もあり、ブラジルの農業に着目した新ビジネスが生まれている。

(注)こうした企業の1つ AgBrazil社は、投資家向けのサイトツアーや生産性、投資収益に関する調査などを実施している。同社の詳細はHPを参照のこと（<http://www.agbrazil.com/>）。

中国向け輸出量はゴイアス州の生産量に匹敵

大豆の輸出相手国1位は中国である。中国向け大豆輸出量は、2003年に前年比47.3%増の610万2,000トン、2004年1～9月は金額ベースで37.7%増となっているものの、数量では2.3%減の560万6,000トンであった。中国向け年間輸出量は、生産第4位のゴイアス州の大豆生産量と同程度であることから、その規模の大きさが伺える。中国向けでは米国、ブラジル、アルゼンチンの3カ国が主要供給国となっている。ブラジルは、広大な国土と肥沃な土壌のため生産拡大余力は3カ国の中で突出している。

中国は現在、ブラジル産大豆をブンギ、ADM、カーギルといった穀物メジャーから購入しているが、ブラジルの産地から直接買い付けようという動きも見られ、大豆工業界をはじめとするビジネス・ミッションが多数中国から訪れている。

一方で、2004年4～6月の期間ブラジルから輸出された中国向け大豆が衛生上の理由で輸入差し止めになるという事件が発生した。この問題により、中国向け大豆輸出のリスクが輸出業者に印象付けられることとなった。

(表4)ブラジルの国・地域別大豆輸出量 (単位)千トン、%

	2004年1-9月	2003年1-9月	前年同期比増減率
中国	5,606	5,739	2.3
オランダ	2,768	3,188	13.2
スペイン	1,475	1,718	14.1
ドイツ	1,416	1,335	6.0
台湾	841	419	100.0
イタリア	762	600	26.9
イラン	560	265	111.2
ポルトガル	497	277	79.3
メキシコ	447	44	919.4
英国	434	424	2.5
その他	8,239	2,906	183.5
合計	17,439	16,915	3.1

(出所)開発商工省

ブラジルの食糧コングロマリット、マジ・グループ

増加するブラジルの農産品輸出は、主に多国籍穀物メジャーが行っている。その分野に参入している主要ブラジル企業として、中西部のマトグロソ州を本拠地に大豆生産・加工・輸出を行うアンドレ・マジ・グループを挙げることができる。同グループの農業分野は、以下の 4 社で構成される。

AMAGGI Exportação e Importação Ltda. : 貿易業

Agropecuária MAGGI Ltda. : 大豆等製造業

Hermasa Navegação da Amazônia S/A : 穀物の水上輸送業

MAGGI Energia Ltda. : 事業向け発電業

アンドレ・マジ・グループの主な事業データは以下のとおりである（出所：同社 HP www.grupomaggi.com.br、2004 年 11 月）

- ・ 年間輸出額：4 億ドル
- ・ 倉庫能力：190 万トン
- ・ 2 つの工場による大豆加工能力合計：3,000 トン/日
- ・ 大豆種の生産・取扱量：27 万袋
- ・ 保有水上ターミナル：ロライマ州ポルトベリヨ、アマゾナス州イタコアチラ（マデイラ川輸送）
- ・ 水上運搬量：120 万トン/年
- ・ 大豆・綿花の生産面積：9 万 2,000 ヘクタール
- ・ 大豆生産量：40 万トン/年（外部買い付けを除く）
- ・ 水力・火力発電量：2 万 5,000 kva

同社の財務諸表で公開されているものは少ないが、「ヴァロール・エコノミコ」紙が毎年発行する雑誌「ヴァロール・グランデス・グルッポス」（2003 年 12 月発行）によれば、2002 年のグループ 4 社合計の財務データは以下のとおりである（2003 年末時点で為替は 1 ドル = 2.90 レアル）

2002 年データ

売上高 12 億 9,890 万レアル（前年比 48.3% 増）

純資産額 3 億 8,850 万レアル（同 49.9% 増）

純利益額 1,730 万レアル（同 13.9% 減）

ROA（株主資本利益率） 4.5%

注目される物流部門

ブラジルの農産品輸出は順調に増加しているものの、以前から指摘されている国内輸送網の未整備には、依然改良の余地が残されている。そうした中、穀物を扱う主要企業は、投資分野とし

て生産拡大に加え物流に注目し始めている。

穀物企業は鉄道輸送の利用頻度を特に高めており、2003年の鉄道輸送量は前年比7.5%増の3億4,500万トン(TU)で、このうち大豆・大豆かすは同13.5%増の3,186万トンと9.2%を占めた。なお、ブラジル国内輸送の道路輸送依存率は60.5%で、以下鉄道が20.9%、水上輸送が13.9%と続く(2000年、交通省)。

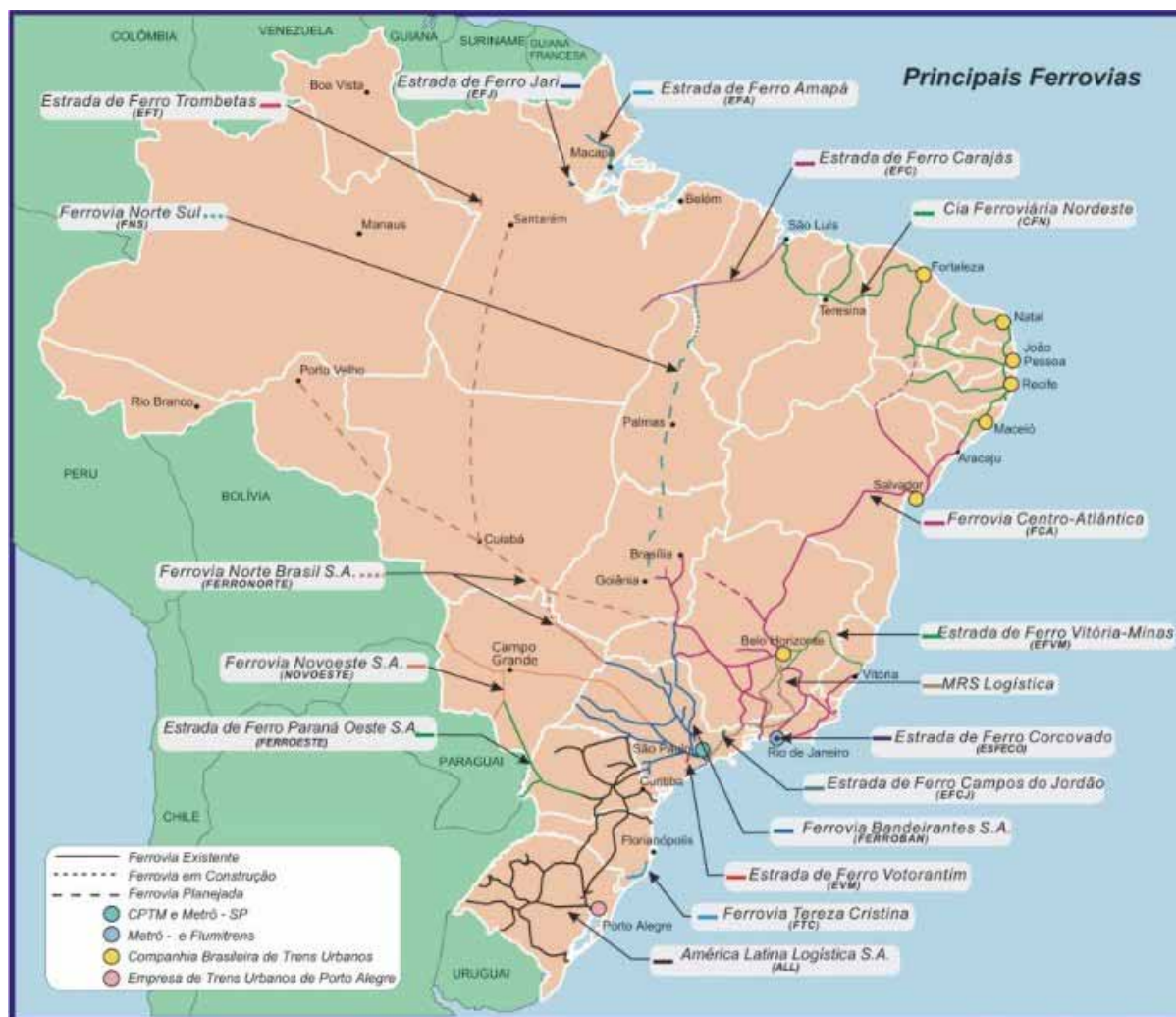
穀物メジャーのブラジル法人ブンゲ・アリメント社は、2004年10月にブラジル南部・南東部に6,586キロの鉄道網をもつアメリカ・ラチーナ・ロジスティカ(ALL)と、2005~2027年の23年間にわたる輸送契約を締結した。

穀物メジャーが、こうした長期の輸送契約をブラジルの鉄道企業と締結することは稀で、ブラジルの農業輸出を長期的な観点で捉えた事例といえる。ALLは、同契約によりブンゲが今後23年間で生産する2億7,000万トンの穀物を輸送する。2003年のALLの年間総輸送量は1,956トンを、そのうち大豆は834万トンである。同社は、2003年に約1万台の貨車と380台の機関車を所有しており、将来的には約4,000台の貨車を要するとみられている。

前出のアンドレ・マジ・グループは、中西部で生産された穀物をマデイラ川からアマゾン川経由で輸送し北部を経てから輸出するため、水上輸送のエルマーザ社を傘下に治めている。同社は、2004年6月に国家経済社会開発銀行(BNDES)から3,410万ドルの融資承認を受け、今後同ルートにおける輸送倍増を図る予定である。このほか、同社は鉄道会社のフェロノルテ、ブンゲ両社と共同で、サンパウロ州サントス港における港湾設備への投資も検討している(2004年11月時点)。

アジア向けが好調に増加している大豆などの農産物輸出は、多国籍穀物メジャーやブラジルの食糧コングロマリットなどを中心に行われている。同時に、欧米農業経営者による土地の買収や、物流分野の投資拡大など、ビジネスの裾野は確実に広がっている。日本企業については、鉱業分野の物流面で三井物産が貨車を納入した実績が報道されている。今後は、農業分野でも鉄道網、輸送車両、港湾設備などにおいて日本企業が参入する可能性が広がってくるとみられる。

(図) ブラジルの鉄道網



(出所) 国家陸上交通局 (ANTT)

2. 食肉

生産が最も増加した鶏肉

2003年にブラジルの食肉生産量は、牛肉が762万9,000トン、鶏肉が784万3,000トン、豚肉が269万8,000トンとなった(2004年のABIPCS予測値は270万トン)。生産推移をみると、輸出増加が顕著な鶏肉の生産増加率が最も高い。

(表5)ブラジルの食肉生産量の推移
(単位)千トン

年	牛肉	鶏肉	豚肉
1994	6,094	3,411	1,330
1995	6,786	4,050	1,470
1996	6,794	4,052	1,560
1997	6,413	4,461	1,540
1998	6,528	4,875	1,699
1999	6,582	5,526	1,834
2000	6,567	5,977	2,556
2001	6,911	6,736	2,730
2002	7,155	7,517	2,872
2003	7,629	7,843	1,698

(出所)牛肉:FNP Consultoria、鶏肉:鶏肉生産輸出車協会(Abef)、豚肉:ブラジル豚肉生産輸出工業協会(ABIPECS)。

最大の牛肉生産州はマトグロッソ・ド・スルで、2003年の生産量は100万7,000トンであった。地域別では同州が属す中西部が生産量の31.5%を占め最大、以下南東部(25.6%)、南部(18.1%)と続く。鶏肉では、南部が55.3%と圧倒的なシェアを占め、最大の鶏肉生産州はパラナである。豚肉の地域別生産量(頭数ベース)は、南部が42.6%、北東部が22.2%と続く。最大の豚肉生産州はサンタカタリーナである。

高まる中国向けの輸出解禁可能性

2003年のブラジルの食肉輸出は牛肉(生鮮・冷蔵・冷凍合計)が62万トン、鶏肉が203万3,000トン、豚肉が45万8,000トンであった(ABIPCSの2004年予測値は35万トン)。鶏肉を除きアジア向け輸出は動物検疫上の問題で少量である。鶏肉のアジア向け輸出は、鳥インフルエンザの影響で2004年に大幅に増加した。ブラジル鶏肉生産輸出者協会(Abef)によれば、2004年1~7月のアジア向け輸出は前年同期比39%増の35万3,431トンであった。うち日本向けは17万7,000トンと約半量を占める。2004年の鶏肉の総輸出額は211万5,000トンであった。

ブラジルの中国向け食肉輸出は、検疫上の問題で認められていない。しかし、2004年11月にブラジルを訪問した中国の胡錦濤国家主席が牛肉・鶏肉輸入に向けた覚書を交わした。今後中国が輸入解禁とする可能性は高く、そうなると中国のみならずアジア向け食肉輸出の増加が予想さ

れる。ブラジル農務省は、解禁初年度に年間牛肉6万トン、鶏肉4万トンを中国に輸出し、3年後には牛肉6億ドル、鶏肉2億ドルの輸出額に達すると予測している。

(表6)ブラジルの国別鶏肉輸出額

(単位)千ドル、%

国・地域	2004年 1-9月	2003年 1-9月	前年同期 比増減
日本	367,333	181,150	102.8
サウジアラビア	229,954	170,747	34.7
オランダ	134,366	110,484	21.6
ロシア	132,512	85,715	54.6
香港	106,166	79,345	33.8
ドイツ	95,481	133,955	28.7
アラブ首長国連邦	80,385	56,505	42.3
英国	68,171	57,918	17.7
クウェート	66,244	36,079	83.6
シンガポール	51,294	33,827	51.6
その他	515,436	297,681	76.7
合計	1,847,343	1,237,404	49.3

(出所)開発商工省

(表7)ブラジルの国別牛肉輸出額

国・地域	2004年 1-9月	2003年 1-9月	前年同期 比増減
オランダ	168,137	94,345	78.2
ロシア	168,077	62,367	169.5
チリ	157,218	95,831	64.1
エジプト	127,332	66,530	91.4
英国	95,628	64,928	47.3
イタリア	95,491	53,107	79.8
イラン	69,091	34,652	99.4
ドイツ	64,864	36,431	78.0
サウジアラビア	57,112	40,245	41.9
スペイン	53,574	37,632	42.4
その他	385,545	179,403	114.9
合計	1,442,068	765,471	88.4

(出所)開発商工省

鳥インフルエンザによる代替供給で収益改善（ペルジガン社のケース）

アジア向け鶏肉・牛肉輸出を支えるブラジルの企業として、2万8,000人（2003年）の従業員を抱えるペルジガン社（Perdigão S.A.）を挙げることができる。同社は、リオ・グランデ・ド・スル州、パラナ州、サンタカタリーナ州、ゴイアス州の各州に13の工場を持つ。これらの生産能力は、週あたりの解体処理数で鶏が900万羽、豚が6万4,000頭、冷凍処理能力は年間で鶏肉が57万トン、豚肉が45万トンである。国内市場シェアをみると、加工食肉製品で24.4%、冷凍肉で34.2%、パスタ製品で34.8%を占め、いずれの 카테고리でも最大手のサジーア社（Sadia）に次ぐ2位に位置する。

ペルジガン社の2003年の売上額は43億7,100万リアルで、うち輸出が18億3,800万リアルと42%を占める（1ドル＝約3.0リアル、2003年末）。前年比は売上が30.8%増、輸出が52.4%増となっており、輸出が売上増に大きく貢献していることがわかる。2004年上半期は、売上高が前年同期比32.3%増の26億1,200万リアル、輸出が同61.4%増の13億500万リアルと売上の約半分を占めた（1ドル＝約3.0リアル、2004年7月）。

輸出売上を地域別に見ると、2003年に欧州が35.5%、日本を含む極東が23.3%、中東が21.2%と続く。2004年上半期に極東地域が29.9%と欧州の29.5%を抜きトップとなっており、その要因は鳥インフルエンザが発生したアジアへの代替供給の影響としている。

同社の利息税金控除前の営業利益（EBIT）は、2003年に2億8,700万リアル、2004年上半期は2億7,500万リアルとなっており、2004年上半期で前年1年分の利益を出している。

ペルジガン社は、2004年に生産性向上のため8,000万リアルを投資し、8%の生産能力増加を図った。国内市場では2003年の利益率を維持し売上増加を、輸出では高付加価値製品の販売に注力するとしている。2004年12月より、再びアジアで鳥インフルエンザが報告されていることもあり、同社の対日輸出は今後増加していくとみられる。

ブラジル畜産物の対日輸出は、生鮮・冷凍・冷蔵では鶏肉のみ認められており、牛肉、豚肉は口蹄疫の問題で輸出は不可能である。しかし、2003年末から2004年初頭にかけて発生したBSEや鳥インフルエンザなどにより、ブラジルは代替供給可能国として世界的な脚光を浴びることとなった。

この影響で、鶏肉はアジア向けで輸出が増加し、牛肉はロシア、エジプト、イラン向けが急増するなど、輸出先は多様化している。米国農務省の2004年10月時点の見通しは、ブラジルが2004年に鶏肉、牛肉で世界最大の輸出国になるとしている。ブラジルの畜産物が、将来的な日本の重要な輸入産品となるにとまらず、日本企業にとっての有望なビジネス分野になる可能性は高いと言えよう。

4．おわりに

ブラジルは、BRICsの中で最も資源に恵まれた国である。経済成長の面でその他3国に劣るの

は事実であるが、農業関連ビジネスではブラジルは絶対的な比較優位を持つ。農産物は国際市場品であるため、需給関係による価格変動や、気候要因というリスクを抱える。しかし、中国、インドそしてロシアといった途上国が発展の速度を速めるにつれ、その需要は確実に増加する。

本稿では大豆と食肉を取り上げたが、これはブラジルの食糧ビジネスのほんの一部である。伝統的輸出品であるコーヒー、オレンジジュースに加え、サトウキビを原料とする燃料用エタノールや 2004 年に対日輸出が解禁となったマンゴーなど、新たな輸出品が次々と生まれている。ブラジルを、日本に止まらずアジアの食糧供給国として捉えた場合、ビジネスの可能性は一層広がるであろう。

(サンパウロ・センター/二宮 康史)

JETRO